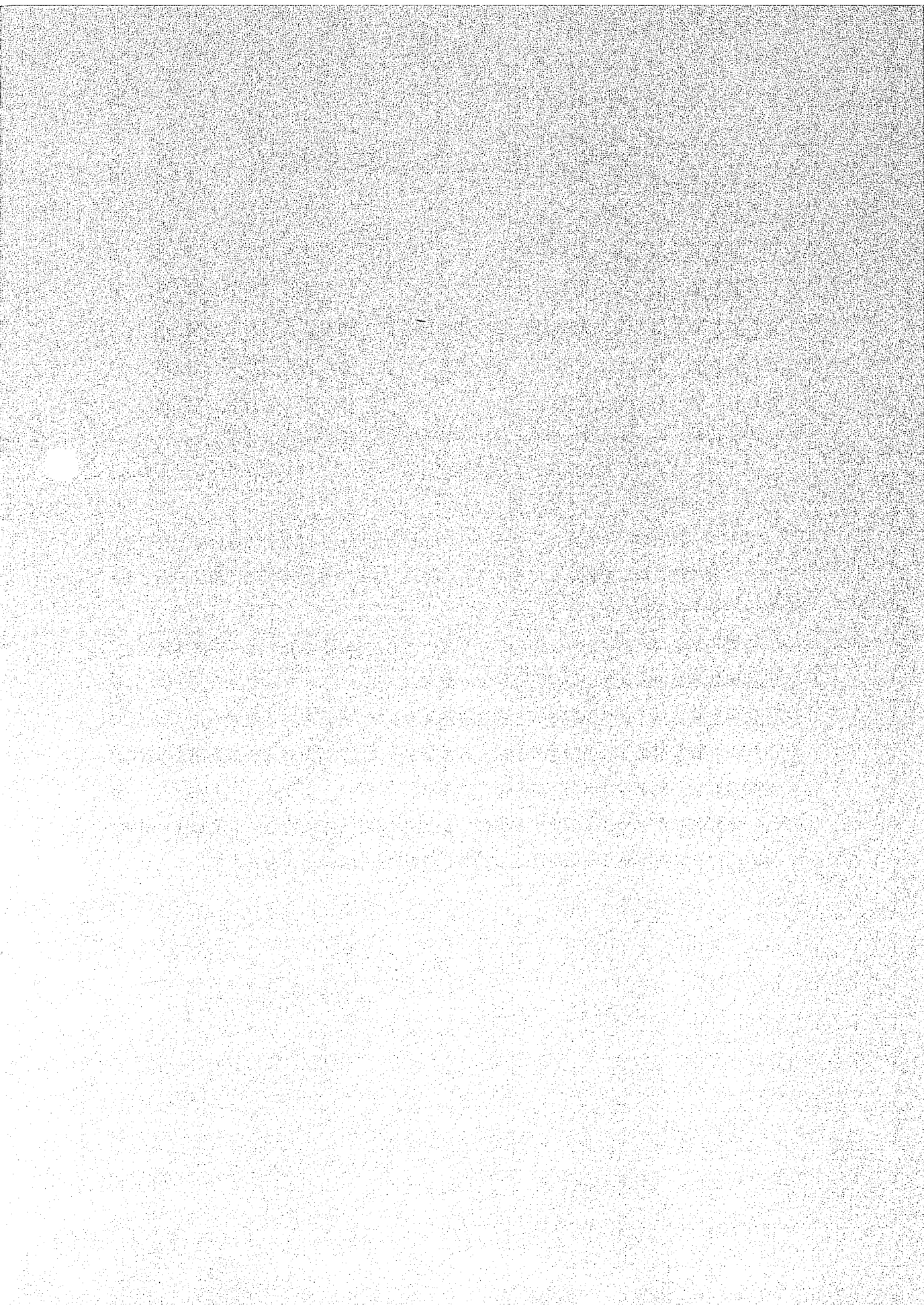


2019 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 15:00~16:00 60分)

1. 解答用紙には、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類があります。
2. 解答は、必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となります。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。また、マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きには使用しないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。
6. マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないようにしてください。
7. 一度記入したマークを修正する場合、しっかりと消してください。消し残しがあると、マーク読み取り装置が反応して解答が無効となることがあります。



— 次の文章（初出一九九七年）を読んで、後の間に答えなさい。（50点）

文字の読み書き能力の研究は、社会人類学の分野でも、ジャック・グディやブライアン・ストリートらによって進められているが、彼らの研究に限らず、文字はしばしば声や口頭伝承との対比で考察されている。最近では、山田登世子が、近年の電話の普及、手紙をしのぐその著しい普及を、声と文字あるいは聴覚と視覚の対比で捉えており、視覚もしくは文字が個人々人を切り離して内面性やプライバシーをつくりだすのに対して、声は隔たりをなくすものであり、それ故共同体への参加を呼びかけるものだと言っている。声と文字のこのような対比は、それらにかかわる身体の器官すなわち耳と目の対比として表現されてきた。例えば柳田国男は、『口承文芸史考』の中で、耳の文芸、眼の文学と言っている。

ところで柳田にしろ山田にしろ、伝達あるいはコミュニケーションの次元で文字と声を捉え理解しようとする姿勢がその根底にあるといつてよいだろう。なぜなら耳と眼、聴覚と視覚とは、メッセージの受信に関わる器官であり、能力であるからだ。コミュニケーションの次元での理解は、さらにその前の段階として、声の普遍性、文字の特殊性ないしは二次的派生物という歴史的事実を前提として受け入れているということでもあるはずである。これは柳田や山田に限らず、多くの研究者に共通した認識のように思われる。「(1)」と山田が言うとき、彼女の念頭にあるのは、活字の配列された書物を読むプライベートな近代空間という人類の歴史の中でずっと後になって出現したものであるし、また声の力が文字の力を破りつつあるという言い回しからもわかるように、声の文字に対する優越を再確認しようというのが彼女の意図でもあるようだ。だからここでは、文字は、せいぜい声⁽²⁾を補完再現し代行するもの、つまりヒヨウシヨウするものでしかない。

しかし、声や文字を、メッセージの伝達という意味でのコミュニケーションの次元でのみ捉え、しかも文字に対する声の優位を強調するのは、果たして妥当なアプローチといえるだろうか。

文字は先に述べたように、眼と視覚に結び付けられて考察される。しかし、それは、まず書き記す紙なり石に触れて、そして記したり時には刻み込んだりするという、触覚に何よりも結びつくものなのだ。白川静の『字統』や『説文新義』によれば、

「文字」の「文」のもともとの意義は、文身つまり入れ墨のことであり、古代中国においても文字はもともと「刻み込み記すこと」やヒフ感覚に結び付くものであったことが分かる。

我々の常識、とりわけ西洋の常識では、文字は声の派生物であり、口にされるや否やたちどころに消えてしまふ声による伝達を補完するものとみなされている。このことは、例えば最近の電話とファックスの関係を考えてみれば、たやすく納得のいくことだろう。しかし声と文字のこのような関係は、決して自然で自明なものではなく、音声中心主義と呼べるイデオロギーに基づくものであることをジャック・デリダはかつて暴いてみせた。かの言語学者ソシュールも免れてはいないとする彼のいう音声中心主義を、今更という気がしないでもないが、まとめてみるなら次のようになるだろう。

出発点にまず意味もしくは意味されるものがあり、ついでそれを音声（意味するもの）が表示し、さらにこの両者の結合を文字が表示するのだから、文字は二次的な「意味するもの」に過ぎなくなる。つまり意味は最も内的なもの、本質的なもので、それ自身として確固たるものであるのに、文字は逆に二番煎じの「意味するもの」であつて、最も本来的で固有な意味というものから最も遠く隔たった外的なものとされる。一方、第一次的な「意味するもの」である音声は、文字に比べれば、意味に近く、その点で文字より価値は高いけれども、それでもやはり意味から隔たつてゐる。だから音声のうちでも、われわれの内心の声は、口頭で発せられる声のように外部を経由する必要がないから、一層意味に近いと考えられているのである。こうした考えが音声中心主義と呼ばれるものである。そこでは、意味というものが根源にあり、それがあたかも神の如く究極的で超越的な支配をするものとして君臨しており、声も文字もそのような意味との関係で、その存在意義が規定されていることになる。ソシュールの説く記号概念にはこうした超越的階層的図式があり、意味の間に身を置こうとする欲求があることをデリダは明るみに出したといえよう。こうした図式ないし欲求、それは西洋の形而上学にとりわけ特有のものであり、決して自然の当たり前のことではないのだが、この音声中心主義が現代の我々の読書行為をも実は秘かに支配していることは、意外に気づかれていない。

例えば次のような文を教室で学生に声に出して読ませたとしよう。

この本で、私はこのむつかしいことを全部やろうとしたような気がする。なによりもまず、私はこの本で私自身のことを前面に出して、私小説ならざる「私精神病理学」とでもいうべきものを書いてしまった。

(木村敏『心の病理を考える』岩波新書、あとがきより)

そして読んだ学生にこの文の「私」とは誰のことかと尋ねたとしてみよう。いかに最近の大学生の国語力が低下しているとはいえ、この文の「私」は著者の木村敏であると「正解」を答えるだろう。

しかしどうしてこれが正解なのだろうか。言語学者バンヴェニストを引き合いに出すまでもなく、普通人は自分自身のことを言うときに「私」という一人称代名詞を使う。件の学生は先ほど「私」と言った筈であるのに、その声に出された「私」は何故学生自身のことではなく、教室にいない第三者の木村敏のことになるのだろうか。このような質問を実際に行ってみると大抵の者は答えに窮する。

『心の病理を考える』のあとがきの「私」という文字が、それを声に出して読んだ学生のことではなく、木村敏のことであるというのはあまりに当然すぎる読書のルールである。これを疑いだせばそもそも読書など成り立たないだろう。だから、普通人はその先までわざわざ考えようとは思わない。しかし、そこで立ち止まって考えてみると、われわれの読書行為は、次の如き音声中心主義を実は前提にしていることに気づく。

すなわち、口頭の会話で「私」がその言葉(音声)を発話した者を指示するのと同じように、文字の世界でも、「私」とはその文字を書き記した者を指示するのであり、読者は、会話の相手が「私」と発話するのを聞くのと同じように、本の著者が「私」と書くのを眼にするのである。会話で発声された「私」が、その音声の聞き手のことを指示しないのと同じように、文字の「私」も、読者が実は著者でない限り、読者のことを言っているのではない。黙読(内心の声)にせよ音読(外にあらわれた声)にせよ、読者は「私」と言っているにもかかわらず、相手の発言を後に引用符付きの直接話法で繰り返すことになる聞き役の立場にいるものと想定されているのである。

つまり、われわれの読書は、音声によるコミュニケーションに準じたかたちで営まれているのである。このように文字で記された「私」は、あくまでそれをしたためた著者に属するのである。読者の声は、作者の声の再現であり代行にすぎないのである。その際、小説などの文学作品における「私」と作者の不一致というケースがあるにせよ、著者の名前を記す、すなわち署名するという行為が、音声中心主義に加担していることは否めない。(と)ところで、音声中心主義に無⁽⁶⁾トンチャクなグディなどのボ⁽⁷⁾ヨウな社会人類学者は、文字の発明と読み書き行為が文明と未開との分水嶺^{がな}であるかの如く論じているし、われわれもしばしばこの見解に与^{くみ}しがちである。われわれは文字や書物、最近ではCDの存在を誇らしく思う。にもかかわらず読書を成立させている原理は、「未開」の口頭伝承のルールと異なるものではなく、それを前提としたものなのである。()

しかし、音声中心主義に基づかなければ読書行為は成立しないし、それは時と場所を問わず普遍的なものだという反発が予想できるが、普遍的というのは必ずしも正しくない。例えば「私」という文字はその書き手を指示しないことがある。プラトンの『パイドロス』の中に登場する、プリュギア人ミダスのための次のような碑銘をみてみよう。

われは青銅の乙女 ミダスの墓の上によこたわる

水ながれ 大なる樹の繁^さるかぎり

ここ ひとみなをなげく塚の上にとどまりて

道ゆく人らにわれは告ぐ ミダスこの地の下に眠ると

この「われ」とは誰のことだろうか。この碑銘は七賢人の一人クレオプロスの作ともいわれる。しかし、「われ」は「青銅の乙女」であり、「塚の上にとどま^る」ものであるから、クレオプロスが「われ」ではないことは容易に理解できる。実はこの場合「われ」とは、作者や碑銘の刻み手のことではなく、碑もしくは碑銘そのものなのである。古典学者のヤスペル・スヴェンブー^ルによると、紀元前六世紀半ばまでの古代ギリシアの碑銘はこのような形式であった。(ちなみにクレオプロスは紀元前七世

紀頃の人である。)そしてその当時文字を読むとは音読することに他ならなかった。声に出すことは読むことの一部、読むことを完成させる行為であった。「道ゆく人」はミダスの墓の傍らを過ぎるとき、立ち止まってその墓碑を声に出して読み始める。するとその声を借りる形で、碑の文字がここがミダスの墓であることを「告げる」のである。読み手の声は、それ自体では声を持たず発音できない文字が「われ」として「告げる」ことを可能にするための補完物であったのだ。

一方碑銘の作者は、文字を書くつまり刻むことが完了するや否や、碑銘文から切り離されて不在になる。そこに作者が「われ」として登場することはない。スヴェンブルーによれば、このような文字とその作者の関係は娘と父の関係にたとえられると言う。父である作者は娘である文字に命を与えたのである。スヴェンブルーのこの解釈が的を射ていることは、ミダスの墓碑銘が自らを「乙女」と述べていることから推察できる。しかし文字の生存を維持するのは父である作者ではなく読み手であり、読み手はいわば婿として娘である文字と結婚し、声という生存の糧を彼女に与えるのである。父である刻み手は、この娘の結婚を機に娘である文字から分離していく。だから婿である読み手は、「義父」に相当する刻み手と直接結びついているわけではない。

ミダスの碑銘に接して「われ」と読み手が言っても、それは彼自身のことではないという点は、『心の病理を考える』の読者の場合と同様である。しかし文字は、書き手つまり著者の声を再現⁽⁸⁾代行しているわけではないし、読み手の声も書き手の声を再現しているのではない。また読み手の声は不十分だった文字の役目をカンベキなものにするために不可欠であった。つまり、文字は声の派生物、補足物ではなく、それ独自の生命(存在様式)をもち、むしろ声⁽⁸⁾が文字をおきかう働きをしているのである。そして声を与えられた文字は、告げるという行為遂行文をそれ自らが行為の主体となって遂行しているのである。

従って、ここでは、文及び読者の声(あるいは眼)は作者の代理というわれわれが自明視する読書のルールは成り立っていないことが分かる。われわれのルールは決して普遍的なものではなく、時代や社会状況を背景に成立した歴史的なものなのである。このルールを無視してはもろろんわれわれの読書は成立しないし、このエッセイにしても、同じ原則に基づいて書かれている。しかしだからといって音声中心主義的読書が全てでもないのだ。文字は声の単なる代わりではなく、文字が声の在り方を決定する場合もあるのだ。

テクノロジーが急激に進展し読書の質も形態も変容していくと囁かれる現在であるが、「読むことの再定位」のために今必要なのは、いたずらに技術革新をもてはやすことではなく、⁽⁹⁾根底にある前提を、たとえそこから逃れられないにしても、絶対視せず見つめ直すことではないだろうか。

(出口頭「文字は告げる——書くことと読むことをめぐって」による)

注 山田登世子……日本のフランス文学者(一九四六～二〇一六)。

柳田国男……日本の民俗学者(一八七五～一九六二)。

白川静……日本の中国古典・漢字学者(一九一〇～二〇〇六)。

ジャック・デリダ……フランスの哲学者(一九三〇～二〇〇四)。

ヤスペル・スヴェンブルー……スウェーデンの古典文献学者(一九四四～)。

〔問一〕 傍線(2)(4)(6)(7)(8)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問二〕 空欄(1)に入れるものとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|------------|---|------------|---|-----------|
| A | 個々人を切り離す聴覚 | B | 隔たりを消し去る視覚 | C | 視覚に優越する聴覚 |
| D | 聴覚に優越する視覚 | E | 隔たりを拡大する聴覚 | F | 距離を作り出す視覚 |

〔問三〕 傍線(3)「声や文字を、メッセージの伝達という意味でのコミュニケーションの次元でのみ捉え、しかも文字に対する声の優位を強調するのは、果たして妥当なアプローチといえるだろうか」という問に対して本文では否定的な答えが出されているが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A われわれはしばしば声や文字をメッセージの伝達の手段だと考えがちだが、そうした考え方はそもそも歴史的事実に反するものなので、そうした前提に立って、文字が声を再現し代表するものだと主張したところで、事実を裏づけられた結論に達することはできないから。

B 声や文字をメッセージを伝達するものであり、文字が声を再現するために発明されたということは、西洋に関しては認められるが、東洋では、文字は触覚や「刻み込み記すこと」などに結びつくものであり、伝達という機能は二次的に付加されたものにすぎないから。

C 文字や声をメッセージの伝達という機能に限定して捉えようとする、文字は単に声の補完物だと考えられるようになり、その結果、文字が声の在り方を決定したり、あるいは文字が触覚と結び付いたりするといった、文字の持つ多様な側面が見失われてしまうから。

D 声や文字の機能をメッセージの伝達にだけ限定し、文字に対する音声の優位を強調するというアプローチの根底には音声中心主義というイデオロギーが潜んでおり、そうした立場に立って声と文字を考察する限り、コミュニケーションの手段としての文字の本質を捉え損ねることになるから。

E 声や文字をコミュニケーションの次元でのみ捉えようとする、音声中心主義に陥ることになり、その結果、声と文字について聴覚と視覚との対比においてだけ考えるようになってしまい、声と文字が触覚とも結び付いたものだという事実が見過ごされてしまうから。

〔問四〕

傍線(5)「その声に出された「私」は何故学生自身のことではなく、教室にいない第三者の木村敏のことになるのだろうか」とあるが、この間に本文の趣旨に従って答えたものとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 読書とは作者と読者との間で交わされるコミュニケーションであり、それゆえ、書物に書かれた言葉は、作者が読者に語りかける声にはかならず、たとえ読者がそれを声に出して読んだとしても、それは読者の言葉となることはできず、常に作者の言葉であり続けるから。

B 「私」という語は、口頭で語られた場合はその語り手を指示するが、文字で書かれた場合にはその書き手を指示するので、書物に書かれた「私」もその書物の作者を指示することになり、それを読者が声に出そうとも、読者はその文字の書き手になることはできないから。

C 「私」という語は、読者がそれを声に出して読む前に作者によって書かれたものであるから、書かれた時点で既に作者を指示することが確定しており、後に読者がそれを声に出して読んだとしても、読者はただ作者の言葉を引用符つきで直接話法で繰り返しているにすぎないから。

D われわれの読書は、話し手と聞き手の間での音声によるメッセージの伝達になぞらえたものだという暗黙の了解のもとに営まれているので、書物に書かれている文字は作者の声の代理と理解され、読者がそれを声に出して読むなら、読者の声も作者の声を代理するものと見なされるから。

E 書かれた文字は書き手からのメッセージであり、読者が書物に書かれた文字を声に出して読んだとしても、読まれた文字は読者自身の言葉ではなく、作者が読者に伝えようとしている言葉なので、そこに「私」と記されていれば、それは読者ではなく著者を指示することになるから。

〔問五〕 傍線(9)「根底にある前提を、たとえそこから逃れられないにしても、絶対視せず見つめ直すこと」とは、本文の趣旨に従うなら、どのようなことか。五十字以内で答えなさい。(句読点、かっこ等の記述記号も字数に数える)

〔問六〕 次の文ア、オのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 山田登世子と柳田国男は、文字と声を伝達あるいはコミュニケーションの次元で理解しようとしている点では同じだが、山田が声の文字に対する優越を再確認しようとしているのに対して、柳田は反対に「耳の文芸」に対する「眼の文学」の優位性を強調している。

イ 文字がもつばら眼と視覚に結び付けて考えられてきたのは、文字をメッセージの伝達という観点からしか考察してこなかったからであり、そうした前提に立つて文字を見ている限り、それが本来有していたはずの触覚との結び付きなどは忘れられてしまう。

ウ われわれの読書はわれわれ自身が気づかないうちに音声中心主義に支配されてしまっているが、それは決して読書のあるべき姿ではないので、われわれは読書その本来の姿に戻すために、まず音声中心主義というイデオロギーを払拭しなければならぬ。

エ 文字よりも音声、そして音声よりも内心の音が価値の高いものだとする音声中心主義の考え方には、意味というものを神のように尊び、そうした意味にできるだけ近づきたいと願う、西洋の形而上学にとりわけ特有な態度が見て取れるが、音声中心主義は今日のわれわれにとっても決して無縁なものではない。

オ プラトンの『パイドロス』に出てくるミダスの墓碑を声に出して読む者が「われ」と言う場合、それはその墓碑の著者を指しはしないが、その読み手自身を指すことがないという点では『心の病理を考える』のあとがきを声に出して読む学生の場合と同じであり、この点では音声中心主義的と言わざるをえない。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(20点)

「ネイティヴ」という言葉自体は、西欧の認識論のなかで、意外に古くから存在していた。ラテン的語源からみれば「ネイティヴ」とは特定の場所に生まれ、したがってその場所に本来的な帰属を持つ人々のことを包括的に指し示す、きわめてニュートラルな言葉だった。じっさい、それは古くは西欧人や西欧社会への積極的な自己言及の表現としてしばしば使用されたりもした。ところがこの言葉は、近代科学のディスクリールのなかでいつのまにか人類学者たちのテクニカルな用語として彼らによって独占的に使用されてゆくことになった。そしてこの頃から「ネイティヴ」はたんにある場所に生まれそこに所属するという土地との無色の関係を意味するのではなく、西欧的都市社会から隔絶された、「未開」の土地における出自と帰属だけを意味するようになっていった。こうして「ネイティヴ」という概念が前提としていた具体的な土地への帰属関係は、強い意味論的な限定をこうむることになったのである。

このことを、一九世紀末から二〇世紀初頭における、インドネシアを中心とするアジアのオランダ系植民地をめぐる記述のなかに探ったのが『想像の共同体』におけるベネディクト・アンダーソンだった。イギリス領マラヤや米領フィリピンズとは明確に区別され色分けされて地図上に示された彼らの「地域的に特定された想像の共同体」バタヴィアに生きる現地の人々を、支配者であるオランダ人がどのように定義していたかについて述べながら、アンダーソンは書いている。

彼らの母語がなんであろうと、彼らはすでにまったくつかえしがつかないかたちで「インランダー」であった。この「インランダー」という言葉は、ちょうど英語の「ネイティヴ」やフランス語の「アンディジェヌ」とおなじように、つねに無意識のうちに逆説的な意味をはらむ言葉だった。植民地において「インランダー」と呼ばれることは、彼らが「劣位にあり」つつ「その場所に所属している」ことを同時に意味した。そしてこうした言葉の使用によって、オランダ人は逆に自分が「優位」にあり、かつ「その場所に所属していない」のだということに満足げに確認していた。

ここで「ネイティブ」という概念は、ほとんど特定の場所に「監禁」され「幽閉」された、という意味あいを含んでいるかのようである。つまり西欧は、自身の可動性と比較したときの現地人たちの物理的な不動性・静止性という性格を、「ネイティブ」という言葉の意味のなかに込めようとしたのだった。場所につきなご止められていることは、発展をつづける当時の西欧にとって後進的で卑しむべき事柄であった。こうして「ネイティブ」という概念は、「場所」の概念と分ちがたく結びつきながら、否定的な、すなわち植民地主義的なディスクールにおける一種の侮蔑的な言葉として彫琢ちようかくされていくことになった。

しかし一方で、「ネイティブ」と「場所」との結びつきは、植民地時代の西欧のなかにもう一つの幻想を、しかも今度はいわば肯定的価値を持った幻想を、産み出していった。さきほどのアンダーソンの記述とは奇妙に対立するかたちで、植民地主義のエンジニアたちは「ネイティブ」な文化をなにかきわめて「伝統的」で「純粹」なものであると見なす傾向をも持ち合わせていた。近代文明とはじめて本格的に出遭ったときの「ネイティブ」な文化は、たしかに西欧文化が失ったなにかを保持しているように彼らには見えたのだ。そしてそのことが、自らすっかり伝統を改変し、始原の「純粹」な人間の価値から離反してきたと考える西欧人の懐旧的な「あこがれ」を誘ったとしても不思議ではなかった。人を殺しておいて、その人の死を悼むようなこうした(1) 的な懐旧的傾向を、レナート・ロサルドは「帝国主義的ノスタルジー」と呼んで厳しい批判を加えている。

帝国主義的ノスタルジーは、つねに西欧近代社会が非西欧の後進地域を文明世界に引き上げようとする一種の社会的使命感に寄り添うようにして現われる。進歩をつづける世界というイデオロギーのなかで、「ネイティブ」な社会のステイックな様態こそが、文明化のイデンティティを規定するための参照点となった。ここでは、進歩のイデオロギーを信じる「われわれ」が伝統の「変革」に価値を求めるとき、つねにその反作用として「われわれ」のなかにもかつて存在した「伝統的」美質へのノスタルジックな憧憬が喚起されることになる。文明化のプロセスが植民地の人間のかたちを変え、それをより可動的なものにするとともに、そこに多くの紛争や葛藤を生じさせ、それを不安定なものにしているという意識は、(2) 「ネイティブ」な文化の「消滅」をあたかも西欧世界にとつての個人的な「喪失」であるかのようなトーンで描き出すことになった。

こうして「帝国主義的ノスタルジー」は、(3) 西欧が自己の「無罪」を証明しようと試みつつ、自らが破壊したものについて語る

という逆説的なディスクールをつぎつぎに生産していった。あらゆるかたちの「伝統文化」の救済や記録や保存への情熱は、それが純粋で無邪気な様相を呈していればいるほど、かえって「無罪」をよそおった破壊として、帝国主義的ノスタルジーに近づいてゆく。近代の人類学もまた、この陥穽かんせいからのがれることはできない。「ネイティヴ」な人々を、現在の時間よりもむしろ原始の時間のうえに投影する傾向のある人類学に特徴的な歴史的パースペクティヴは、だからそうした人々をしばしば「失われた」存在として形容してきた。ヨハネス・ファビアンは書いている。「われわれの〈現実〉における〈他者〉の不在は、われわれの〈ディスクール〉における彼らの顕在として現われた。それは〈対象〉としての、そして〈生贅いけぼ〉としての顕在であった」。つまり一九世紀の人類学的実践とは、「ネイティヴ」な現在を失われたものとして歴史化し、そのうえで「過去」の理想的人間社会の調和のイメージを復活させようとする逆説的な二重性において、まさに生者を対象に行なわれた死亡者名簿の作成行為だった、といえるのかもしれない。

(今福龍太『クレオール主義』による)

注 ディスクール……言語表現の総体、言説。 スタティック……静的な。 パースペクティヴ……見方、視点。

ベネディクト・アンダーソン……アメリカの東南アジア研究者、ナシヨナリズム研究者(一九三六～二〇一五)。

レナート・ロサルド……アメリカの人類学者(一九四一～)。 ヨハネス・ファビアン……ドイツの人類学者(一九三七～)。

〔問一〕 空欄(1)に入れるものとしてもっとも適当な語句を本文中から二字で抜き出し、答えなさい。

〔問二〕 傍線(2)「ネイティヴ」な文化の「消滅」をあたかも西欧世界にとつての個人的な「喪失」であるかのようなトーンで描き出す」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 非西欧圏の「ネイティヴ」の文化が失われていくさまを目の当たりにした西欧の人々が、それを自分たち個々人の体験と同一視して感情的に論じるということ。

B 帝国主義的な視点を持つ西欧の人々が、植民地の「ネイティヴ」の文化を自分たちに所属するものと考え、それが失われることを自身の一部の喪失であるかのように論じるということ。

C 非西欧圏の「ネイティヴ」の文化の消滅を人類全体の貴重な文化の消滅ととらえる西欧の人々が、世界の文化の中心である西欧こそが担うべき自分たちの問題として自覚的に論じるということ。

D 西欧の人々が、非西欧圏の「ネイティヴ」の文化の中に自分たちが失った純粹な人間的価値があると考え、それが消えていくさまを西欧の文明化と重ね合わせながらノスタルジックに論じるということ。

E 非西欧圏の「ネイティヴ」の文化が失われることについて、自分たちが推し進めた文明化がその原因であることを自覚し反省した西欧の人々が、罪の意識を持って論じるということ。

〔問三〕 傍線(3)「西欧が自己の「無罪」を証明しようと試みつつ、自らが破壊したものについて語る」を説明するものとして

もつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 西欧の人々が、自分たちは非西欧圏の文化を破壊したまま放置しているわけではないと主張するために、失われつつある非西欧圏の文化を記録し、それらの保護の必要性について語るということ。

B 西欧の人々が、自分たちは非西欧圏の文化を破壊した加害者であると同時に被害者でもあると考え、西欧・非西欧という枠にとられない人類全体の失われた文化について語るということ。

C 西欧の人々が、自分たちが非西欧圏の文化を破壊したことを文明化という名のもとに正当化し、文明化される前の非西欧圏の伝統的な文化について無邪気に懐かしさを込めて語るということ。

D 西欧の人々が、非西欧圏を植民地化しその文化を破壊した責任を否定しようとして、それらの文化の消失は時代の変化をもたらした歴史の必然であったかのように語るということ。

E 西欧の人々が、非西欧圏の伝統文化は西欧によって破壊されたという意見への反論として、歴史の中で西欧社会がいかに伝統文化を重視し保護してきたかについて語るということ。

〔問四〕 傍線(4)「生者を対象に行なわれた死亡者名簿の作成行為」を説明するものとしてもっとも適当なものを左の中から選び、

符号で答えなさい。

- A 同時代に生きているとはいふものの非近代的な文明の段階に留まっている「ネイティヴ」の人々を、時代の変化に取り残された否定すべき存在として扱い、記録すること。
- B 現代に生きる「ネイティヴ」の人々の中に西欧文化が文明化の過程で失った美徳を投影することで、彼らの文化を過去の西欧文化を継承するものとして扱い、記録すること。
- C 「ネイティヴ」の文化が西欧由来の文明化を拒絶しながら存在しているという現実を無視して、彼らの文化をすでに死滅した過去の遺物であるかのように扱い、記録すること。
- D 西欧の近代化を経していない「ネイティヴ」の文化をあたかも「生きた化石」であるかのように見なして、こんとん混沌とした原始の時代の文化の代用として扱い、記録すること。
- E 「ネイティヴ」の文化を同時代に生きている人々の文化としてではなく、文明化によって失われた理想的な始原の文化として扱い、記録すること。

〔問五〕 次の文ア～オのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 進歩のイデオロギーと土地を移動する自由を有する西欧の人々が、植民地の人々を「ネイティブ」という言葉で呼ぶとき、そこには彼らの後進性・不動性に対する否定的な意味合いが含まれていた。

イ 西欧世界には、「ネイティブ」の文化の中に、西欧が失った伝統的で純粋なものという肯定的価値を見る人々もおり、「ネイティブ」という言葉の定義をめぐって論争と混乱があった。

ウ 近代の人類学における「ネイティブ」研究は、文明化以前の人々の姿や文化をイデオロギー抜きに観察し、ありのままに記録し、客観的に分析するという歴史学的視点を導入したものだだった。

エ 本来「ネイティブ」という言葉は未開の土地との関係のみを示すものではなかったが、人類学者のディスクールの中で、西欧文明から隔絶された土地に生まれ帰属することを意味するようになった。

オ ベネディクト・アンダーソンによれば、アジアのオランダ系植民地では、優位の立場にある支配者が、実は自らがその場所に帰属していないという矛盾に悩んでいた。

三 次の文章は藤原惟規のぶのりの和歌にまつわる話である。これを読んで、後の問に答えなさい。(30点)

(1) 人知れず思へばうける言の葉もつひに逢瀬あふせの頼もしきかな

これは、惟規といへる歌よみの、女のがり遣はしたりける歌なり。この歌の心は、唐に、呉松孝ごしょうかうといひける人の、宮中の内より流れ出でたる川の流れに遊びけるに、詩を作りて書きたりける木の葉の、流れて下りけるを見つけて、取りて見れば、柿のみぢの赤かりけるに、詩を書きたりけると、思ひけるより後に、女の手と見えければ、いかなる人作りて書きけん(3)、この人ゆかしさに、思ひになりて、すべきやうも覚えざりければ、その詩(4)の和を作りて、同じ柿の葉に書いて、その川の水上に流しければ、九重の内に流れ入りに(5)けり。その後、恋しきたびに、この柿の葉の詩を取り出でて、泣くよりほかのことなかりけり。さて、年月を経る程に、かの宮の内のうち籠められて、いたづらに年を送る女、この数あまり積もりぬれば、「いとほし(6)。我を頼みて、いたづらに年を送る。いとほしきことなり」とて、少々をば各々親々にかへして、男をもせ(7)せんとて、帰し給ひけり。その人に、かの松孝を婿取りつ。松孝、柿の葉に詩を書きたる人のみ恋しくて、いかにも異事ことごとせんとも覚えざりけれど、親のすることなれば、心にもあらで、婿になりけり。この女の、思ふ様ようにて、あはれに心苦しかりければ、かの明け暮れ恋ひ悲しびつるも、やうやう思ひ忘れて経るほどに、女のいひけるは、「我が物思ふ人のけしきにて見えしは、いかなることぞ。願はくは、我に隠すことなかれ」。松孝、答へて曰く「我、昔、宮の外にして、川の流れに遊びき。水の上に木の葉のあるを見れば、女の手跡にて、ひとつの詩を書けり。それを見て後、その主に相逢はんと思ひて、今日今に忘ることなし。しかはあれど、君にかく親しくなりて後、ことのほかに思ひ慰めるなり」といへり。女これを聞きて、「その詩はいかがありし。またその詩の和か作りたりし」といひければ、「しかありき」と答へければ、女、このことを聞くに、涙さきに立ちて、契りの疎そかならぬことを知りぬ。「その詩は自らの詩なり。和の詩、まだ我がもとにあり」といひて、各々取り出でたるを見れば、互ひに我が手にて見ゆるを見るに、おほろけの契りにはあらざりけりといへることを知りぬ。(8)「そもそもいかにしてか、我が詩をば得し、この身いたづらにして月日を送ることを嘆きて、川のほとりに遊びき、岩のはざまに流れ留まりたる木の葉を見ればひとつの詩あり、

もしありし我が詩を見ける人の作れるかと思ひて置きたりつるなり」とぞ申しける。これを聞けば、妹背いもせのなからひ、先の世の契りの疎かならぬより思ひ寄ることなれば、悪し良しとも定むべきにあらず。

〔俊頼龍腦〕による

〔問一〕 傍線(1)の和歌の説明として正しいものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

- A 体言止めが使われている。
- B 「人知れず」は枕詞である。
- C 全体が対句形式になっている。
- D 「言の葉も」までが序詞である。
- E 「うける」と「瀬」は縁語である。

〔問二〕 傍線(2)(3)(4)(7)の解釈として、もつとも適当なものを左の各群の中から選び、符号で答えなさい。

- (2) 「女のがり」
- | | |
|---|-------|
| A | 女ざかりで |
| B | 女のもとへ |
| C | 女の求めで |
| D | 女のために |

(3) 「この人ゆかしさに」

- | | | | |
|------------|------------|------------|------------|
| D | C | B | A |
| この人に傷つけられて | この人がなつかしくて | この人がおもしろくて | この人に興味を持って |

(4) 「詩の和」

- | | | | |
|---------|---------|---------|---------|
| D | C | B | A |
| 詩を和訳した文 | 詩に応答した詩 | もとの詩の題目 | 詩に答える和歌 |

(7) 「男をもせさせん」

- | | | | |
|----------|----------|----------|----------|
| D | C | B | A |
| 男と離婚させよう | 男を左遷させよう | 男に支援させよう | 男と結婚させよう |

〔問三〕 傍線(5)「に」と文法的に同じものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

- A 国くにになき物なり (竹取物語)
- B 草葉くさばにあらねど (古今集)
- C 日の暮れぬるに (大鏡)
- D 塵灰ちりばとなりににき (方丈記)
- E 山吹のきよげに (徒然草)

〔問四〕 傍線(6)「我を頼みて、いたづらに年を送る」とは、どのようなことを言っているか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 帝である私の許可を待っていたにもかかわらず、私は二人の結婚を長い年月の間許すことはなかったということ。
- B 帝である私に対し誠実に接していたにもかかわらず、私は女に悪ふざけばかりして年月を送ってきたということ。
- C 帝である私に不満を訴えていたにもかかわらず、何年もの間二人を過酷な労働に従事させてしまったということ。
- D 帝である私に手紙を送っていたにもかかわらず、私は何年経ってもその手紙を見ようとはしなかったということ。
- E 帝である私の寵愛をあてにしていたにもかかわらず、それも叶かなわず女は無駄に年月を送ってしまったということ。

〔問五〕 傍線(8)は、二者の会話で成り立っている。前者の会話の終わりとして、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で

答えなさい。なお句点は全て読点にしてある。

A してか

B 得し

C 嘆きて

D 遊びき

E 詩あり

〔問六〕 次の文ア～オのうち、本文の内容に合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えな

さい。

ア 女は、松孝と結婚したものの次第に心が離れていった。

イ 松孝は、当初その女と不意な結婚をしたと思っていた。

ウ 惟規は、川から流れてきた柿の葉の裏に漢詩を書き付けた。

エ 女の親は、松孝の詩に感動したことで娘婿にしようと思った。

オ 松孝の親は、息子をお世話になった人の娘と結婚させた。

